



角川文庫

—4085—

ピラミッドの日

川田武



角川書店



昭和五十三年六月十日 初版発行

定価は、カバーに  
明記してあります

角 川 文 庫  
ピラミッドの日



著 者  
川 田 武

発 行 者  
角 川 春 樹

印刷者  
長 宗 泰 造  
東京都文京区目白台二ノ七ノ六

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三  
角川文庫  
電話一〇二〇〇  
東京③一九五二〇八

株式会社  
角 川 書 店

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 厚徳社印刷・大谷製本  
0193-145201-0946(0)

ピラミッドの日

他七篇

川 田 武



角川文庫

4085



## 目次

|                     |     |
|---------------------|-----|
| ハロー商会               | 五   |
| ニュース・キャスター          | 五   |
| ずれる……               | 一〇八 |
| 残響室 <sup>きこしむ</sup> | 一三二 |
| 飛んでもスタジオ            | 一六三 |
| 車窓の風景               | 一八〇 |
| 実力行使                | 二二四 |
| ピラミッドの日             | 二四六 |
| 解説                  | 二六六 |

武蔵野次郎

二六六



## ハロー商会

## 1

## 「3六歩」

棋譜を読み上げる声が部屋へやの静けさを破った。

対局者は、豪快な攻めを身上とする横山九段と、若手ながら守りに強い片桐五段かたぎり。このところ連勝を続けている横山九段が、片桐五段を軽く手玉にとるだろうというのが大方の予想だった。ところが勝負は序盤から、不思議な展開を見せていた。

片桐五段がいつになく鋭い攻めをするのに対し、横山九段は自陣の王を守るのが精一杯という様子なのだ。

片桐五段といえは、これまで棋力は相当なものだといわれながら、生来の気の弱さからいつも大事な勝負を落としている棋士だった。

それが、今日は戦う前から氣迫が違っていた。何かあたりを圧する生氣が感じられて、観戦記

者たちを驚かせた。

「4三銀」

片桐五段が力強く敵陣に銀を打ち込んだ。

ここでいつもの横山九段なら敢然と三八歩、飛先の歩をつき棄てて戦端を開くところだった。

控え室で戦局を見守っていた記者たちも、三八歩を当然の手筋と読んでいた。

「8二王」

その時、横山九段は何と王を8筋によせるという守りの手を指したのである。

控え室がどよめいた。

「横山さん、今日はどうかしているな」

「どうして攻めの手筋が出ないんだろう」

記者たちは口々に呟いて、対局室の方に目を向けた。

片桐五段が腕組みをして悠然と盤上を見おろしているのに対し、横山九段は伏目がちにじっと

考えこんでいる。

「もう勝負あったようなものだな」

二人の対局の様子を見て一人が小声で言った。

事実、勝負は片桐五段の一方的な勝利となった。

矢張り「8二王」と王を守ったのが良くなく、敵陣に攻め込む機会を失ってしまった。

予想外の惨敗を喫した横山九段は、対局後、記者の質問にこたえて、こう話している。

「今日は最初から、片桐君に気合い負けしていましたが、問題の局面の時も、3八歩と勝負に出れば有利に展開出来るというヨミもありましたが、片桐君の打ち込んで来る気力に押されて、ついつい守勢にまわってしまいました。あとは陣形がちぢこまってジリ貧です。しかし、それにしても、片桐君の急な成長には驚きました。人間的に一まわりも、二まわりも大きくなった感じがです」

\*

「きのうの戸田雄二は、本当に別人かと思う程素敵だったわ」

助手の小笹美子は幾分興奮した表情で私に話しかけた。

ここはK大学心理学研究室、実験データを整理する作業が終わって、二人ともほっと一息ついたところである。

私は小野木雅彦。ぼつぼつ頭には白いものが混じる年代だがまだ肩書きは小笹と同じく心理学研究室助手である。

「あのおんぼろ楽団から素晴らしい音色をひき出すなんてことは、誰にも出来るといふものじやあないと思うのよ」

「それでは戸田というのは大した指揮者なんだね」

「ところがそれが違うから不思議なの。戸田雄二というのはこれまで何度か見たことがあるけれど、いつもピリッとしなない指揮で、楽団員からバカにされているといったふうだったわ」

彼女はきのう、音楽好きの友人たちと連れだって、戸田雄二の指揮する東都交響楽団の定期コンサートに出かけたのだという。

東都交響楽団は、最近主だったメンバーが抜けて音が荒れているという評判が流れていた。さらに悪いことに、一行は地方演奏会からの帰途、飛行機が故障して何時間も足止めをくい、その日全員がホールに揃ったのは開演の二十分前だった。

フリーの指揮者である戸田雄二は、楽団員とほとんど顔を合わせることも出来ないまま開演の時間をむかえたのである。とてもいい演奏を期待出来る状態ではなかった。

ところが、舞台の袖から戸田雄二が現れると、それまで何となくだらけた雰囲気ふんいきの楽団員の間不思議な興奮が広がった。

小笹美子の目にも、その夜の戸田には、はっとする程の威厳が感じられた。

ゆったりと指揮台に向かう彼の身体からだから、光り輝くものが四方に放射されているようにさえ思えたという。

楽団員は、戸田を眩まぶしそうな目で見、心理的催眠のような状態で楽器をとりなoshした。

コンサートホールは静まりかえった。

戸田雄二が、おごそかに指揮棒を一閃した。

そして、小笹美子のいう「奇跡」が起こった。

いつもはちぐはぐな音を出すバイオリンが、見事なハーモニーをかなでた。

管楽器は、神の乗り移ったような透明な音色を出した。

どれだけ一流のメンバーを揃えても、これほどのものは聞かれないという素晴らしい演奏がく  
りひろげられた。

「楽団員たちは、戸田に圧倒され酔ったように演奏を続けたわ。そして私たちも、同じように  
戸田に酔ってしまったの」

「戸田雄二という指揮者は、きのう突然、そんな力を身につけたのかい」

「そうらしいのよ。この前の演奏会で戸田を見たというお友達がいたけど、いつもと同じ調子  
で、ちっともさえなかったって言ってたわ」

不思議なことが重なるものだ、と私は思った。

私はさっき、横山九段が片桐五段の気迫に負けたという新聞記事を読んでいたところだった。

あの向こう意気の強い横山が指し手を萎縮させるなどというのは余程のことだ。

「片桐五段の場合も、戸田雄二と大変良く似た現象だと思うね」

私が、小笹美子に、きのう起こった不思議な対局について解説をはじめたとき、助教授の神島威夫が口をはさんだ。

「そういうのは、プラトー現象の一種だよ」

助教授とはいっても、私より五歳も若い。名門T大学を出た俊才である。

「君たちも、プラトー現象のことは知っているだろう。発達心理学を専攻しているんだから」  
私は黙ってうなずいた。

プラトー現象とは、人間の練習量と能力の伸びに関する理論である。

人間の能力は、練習量に正比例してどんどん伸びてゆくというものではない。

長く練習していても、少しも進歩しないという状態がある。そして何かのきっかけをつかむと急に能力が伸びる。その成長もある段階に達するとストップし、再び成長曲線はゆるやかな平原を描く。

そうした階段状の曲線を繰り返しながら、人間の能力は伸ばされてゆく。

いくら練習しても進歩が少ない状態をプラトー（平原）とよび、急に成長しはじめる転回点をプラトーを越えたなどと呼ぶ。

「それにしても、戸田雄二にしても、片桐五段にしても、余り急に成長するというのも、神がかっていて気味が悪いわね」

小笹美子がそういつて肩をすくめた。

## 2

テレビ局の出演者ロビーというのは奇妙な世界だなど、私はいつも思う。

まげを結った捕方<sup>とりかた</sup>が葉巻をふかしている横では、十二単<sup>じゅうにひとえ</sup>を着た女官がすました顔でコーヒーを飲んでゐる。

街の中でこんな風景を見たら、みんな驚いて、大変な人だからになるだろう。しかしこのロビーでは、誰一人彼等に注意を向けるものがない。

私はこのAテレビ局のアナウンサー東俊也<sup>あずましゅんや</sup>を待っている。

東と私とは学生時代からの友人だ。

一年に何度かむだ話をするだけの間柄だが、何故かお互いに気が合う。

今日は東の方から誘いの電話があった。彼の指定した時刻までには、まだちょっとある。

私は、すみっこのテーブルに坐って奇妙な世界を楽しんでいた。

注文したコーヒーをすすってふと顔を上げたとき、私は突然ロビーの片隅<sup>かたすみ</sup>に不思議な気配<sup>けはい</sup>を感じた。

そこには、丸いテーブルを囲んで三人の男が坐っていた。

一人は確かに片桐五段である。横山九段をくだし、にっこり笑って腕を組んでいる写真を、今朝の新聞で見たばかりだ。

もう一人は、後向きで良く見えないが、長髪の年配の男。

そして、白髪の中年の男が、おだやかな笑顔で二人の話を聞いている。

「気配」というのは、その三人のあたりから立ち上っているように思えた。

「やあ小野木、どうもお待たせ」

東が私の肩をたたいた。

「夢中になって何を見てるんだい」

「あそこだよ。どうしてだか知らないがあの三人何となく目立つじゃないか」

「そういえばそうだな。あ、あれは将棋の片桐五段、後向いているのは戸田雄二だよ」

「え!？」

私は驚いて聞きかえした。

「あれが戸田雄二かい。指揮者の」

「そうだよ。間違いない。それにしても、最近戸田をよくロビーで見かけるなあ」

「そんなに録音が多いのかい」

「いや。仕事じゃないんだ。おとといなんか夜の十二時頃に、このロビーにいたよ」

「真夜中に？」

「おととい僕は宿泊勤務でね。放送終了のアナウンスをすませて部屋に帰ろうとすると、ロビーからぼんやりとした光が見えるんだよ。その時刻にはロビーは消灯されているはずだと思って扉のすきまから中をのぞいてみると、戸田雄二がじっと一人で坐ってるんだ」

「眠っていたんじゃないのかい」

「そんなことはない。彼は大きな目を見開いていたからね。僕はうす気味悪くなってすぐ部屋にとんでかえったよ」

「そんな時間に何をしていたのだろう」

「全く見当がつかないな。それに電灯もついてないのに彼の姿が見えたというのも、後で考えると不思議な話さ」

彼はちよつと肩をすくめ、すぐ氣をとりなおしたようにいった。

「さあ、今夜は僕がおごるよ。ちよつと面白くないことがあつてね。いろいろ聞いてほしいんだ」

私は学生時代から、彼の愚痴話の聞き役を引き受けている。

「あいつは、親父の威光をかさに来て……」

もうだいぶ酒がまわっている。東は何度も同じことをくりかえした。

彼は演芸番組のアナウンサーだ。Aテレビ局に就職して十五年。今年からお昼のバラエティショーの司会を担当するようになった。やっと花形アナウンサーへの道が開きかけたところだ。

東は学生時代はどちらかといえば陰気な性格だった。学者肌がくしやばだのところもあって、青くさい論議をふきかけられて困ったこともある。

その東が、Aテレビ局に入って、ローカル放送局を転々としている間に、いつのまにかお笑いタレントたちとふざけ合う番組を持つようになった。

私は、彼をときどき痛ましく思うことがある。演芸番組の司会をしている東は、私の目から見ると、どこか無理をしているところがあって自然ではない。

もっと性格にあった、まじめな番組にかわったらどうかと忠告したこともあった。

しかしこの世界では、一旦演芸番組担当という色分けをされると、他のセクションへまわることがむづかしい。

東は、ともかく与えられたバラエティショーに取り組んでみると真剣な顔で決意を話していたものだ。

ところが今日、東は上司から思いがけないことを耳うちされた。

東がレギュラーからはずされる。そして後任には田中という若いアナウンサーが決まることになるかも知れないというのである。

君の司会がまずいというのではないのだよ、と上司はいった。

君は君なりに一生懸命やってくれた。しかし君はどことなく控え目で、周囲をパツと晴れやかにする陽気な気質に欠けたところがある。

お昼のバラエティは、今度、もっと明るいまーどに転換することになった。

後任は田中君に任せようと思う。彼はかねてから、君にかわってあの番組を担当したいと申し出ていたんだ。そう言って上司は申し訳なさそうに笑ったという。

田中というアナウンサーは、経済界の黒幕の一人息子ひとりむすこである。特に目立って芸がうまいという訳ではない。只、たとえ彼が何もいわなくても、上役たちは彼の父親の存在を知っていて、無意識に彼に一目おいている。

人々は、彼自身ではなく、彼の後にぼんやりと見える父親の姿に怯おびえてしまうのだ。

「あんなやつよりは、まだ俺おれの方が司会はうまいはずだ。親の七光りをかさにきたやつよりはな」